

感謝の心を忘れず、 真摯に取り組む

今回の夢追い人は、
湊屋の志岐浩実さんにお話を伺いました。

先祖に感謝しながら

湊屋は今年で創業二一〇年。浩実さんは七代目にあたります。「私の曾祖父の頃から建具の品評会が行われていたようで、我が家には明治時代の褒賞状があります。その頃やそれ以前に作られた作品もまだ残っています」



全国展上位入賞



明治時代の褒賞状

湊屋 志岐 浩実 さん

志岐さんが建具業界へ携わるようになったのは、二十歳からとのこと。「わからないことを父に聞くこともありました。その際に『なんで聞かやんと？ おぎやーと生まれた時から見て、使ってたけん、知つてろやもん』と言われましたね。特に子供の頃から慣れ親しんだので、一尺二尺と言った尺貫法はわからなかったです。慣れるまで大変でした」

「利右衛門、源助、惣吉、利八、政吉、信夫、それから私と七代目、信夫、えらいねと言われます。でもたまたま私がここにいて七代目になっただけです。先祖が長年続けてきてくれたから私も続けられています。このことに対する礼儀と感謝、建具職人がたくさんいる中でお客様が私を選んでくださることに感謝しています。大々的な営業もしていません。私を選んでくださる。それに対する恩返しはやらなくちゃいけないし、やれと言われたら意地でも頂きます。せつかく選んで頂い





日商から依頼を受け作られた作品
(左 津村会頭・右 志岐さん)

「たんだから、その期待には応えないといけないなと思ってます」

志岐さんならではのデザインが目を引く作品たち。そういったデザインはどのような過程で生まれているのでしょうか。

「いろんな方の作品を見たりするのも好きですし、先代たちが代々作ったものも見ていて、どういう現場でこういう組み合わせで...といったことも含めて覚えていて、平日頃から何かを見ていてアイデアを探しています。もちろん田舎でも良いですけど、よく都会に遊びに行つて、良いヒントや刺激を受けています。都会のスイーツショップに並んだケーキなんかもいいデザインのヒントになりますね」

“私”だけのイメージを大切に

日本商工会議所(以下、日商)からの依頼で、パティシオンを作成された志岐さん。作品の出来栄えについては「シンプルだったけど品が良いとおっしゃってくれると思います」とお話をしました。津村会頭からお話を頂いて作成しました。納品までの日

数も少ないけれどというお話をしました。ぜひ!とお引き受けました。どんな仕事であれプロだと認めてもらつたのであれば、出来る出来ない、するしないではなく、出来る限り条件に对应するのが本当のプロ根性だと思つています。それから今回もたくさん選んでくださった、そのことに對する感謝ですね」

お客様の要望・条件に応じて作品を作る志岐さん。1つの作品を作るのにどれくらい時間が必要なのでしょう。か「作品によっては一年以上かかるものもあります。手の込んだ作品になれば、高級国産車が買える値段のものもありますね」

実際に触らせて頂いた部材は力加減次第では簡単に折れてしまふようなほど!一体どれくらい細かさなのでしょう。か

「細かいものになるとミリ単位なんてものじゃないですね。頼りになるのは指の感覚だけです。測つてもいいと思いますが、木材の種類や木材そのものの癖があるところないところによつて違つてきます。だから指の感覚が一番です。作業をする際、昼と夜でも木材が驚くほど違うものになつていられるとお話された志岐さん。

「昨日は良かったけど、朝になると組手切りや組手合わせが合わないなんてこともよくあります。それが作業を始めたら止められない大きな理由の一つですね。寝て起きたら誰かがいたずらをしたんじゃないかならうかと思つて、あともなつてますから。あとでも

と大変な思いをするのは自分だから、じゃあやめてしまおう!と思つて夜中から朝方まで続けることもありつて、それから作業を続けているとどんどん違うものが出来てきます。こうしたらもつと良いものが出来るかもしれない。思いながらやつてみると面白いです。そうなるにつれて作業も止められないですね(笑)」

「湊屋といえ、色鮮やかな建具、組子の作品のイメージがあります。志岐さんにそうお伝えですからね」と答えられました。

「人工的な染色はせずに木本来の色で表現します。黒檀は杉や檜とは違つてかなり堅い木材で、小さな組子の部材サイズに加工する人は本当に少ないと思います。でも私はやつちやいますね、好きです。から。それから湊屋は柔らかい曲線のイメージだと言つていただけませんが、最近はこちらの方が作られたでしょう」と言われ、料理でも同じ素材を使つても料理人によつて仕上がりが違うように、建具も同じ模様を作つても職人によつて表情が違いますね。なので、私の作品は他の人には触らせません。特に私の場合丸いイメージがあるもので、なんともなく漂う、秘めるもの伝わるもので、私以外がやつたかやつていないかがすぐにわかりますね」

また作品そのものに関して「見方や覗き方、昼と夜でも全然違う表情に見えるから、地方にお話された志岐さん、司さんから『志岐さん、組子とは一体なんぞや』と問われ

た時、父は『組子とは木と和紙の調和、光と影の明暗』と即答したそうです。その言葉は、私も小さい頃から聞いてきてよく覚えていました。父と話した時にも教えてくれました。『それってどんな世界でも言えることじゃない。なんでも話したことも覚えています。でも違つたのは、宮司さん曰く『いろんな業界の方に尋ねるが、即答された方はいなかつた。即答されたのは志岐さんだけ』と教えてくださったし、『その道に精通された方なんだな』と思いましたが、『とも仰られました』

ひとつひとつ真面目に

全国建具展示会には第二回大会から参加しており、湊屋としては半世紀近く出品されているとのこと。

「父も全国建具展に出品して、上位の賞をたくさんもらつています。内閣総理大臣賞は二度受賞も父で、九州勢で初めての受賞も父で、湊屋として、あと一回受賞すれば業界では殿堂入りになります」

志岐さんが全国建具展示会に初めて参加されたのは、十四年前の佐賀大会だったそうです。「父は二十六年前に亡くなつており、母も十五年前に病に倒れたことがありました。そのタイミングで事業を辞めようと思つて、廃業に関する書類を書く前だったこともありました。そんな折に全国大会が佐賀で開催され、その時に『女性で、全国大会にチャレンジする人はまず少ないだろう』と思ひ、母の看病もしながら正味二週間作品を仕上げた作品が選ばれて、落選してもいい、周りに笑われても、いい思いながら出した作品でしたが、全国で十四番目の賞を

頂けました。私の初陣だったんですが、まあまあ面目がたつたなと思ひました。今になつて見れば、本当に仕事が悪くて、できるだけ視界に入れたくないので事務所天井に飾つています」

また今年五月に元号が変わるにあたり、志岐さんご自身も心機一転される予定とのこと。

「この機に初代の志岐利右衛門の名を雅号として名乗りたいと思つています。私が勝手に名乗るだけではないんです。先相あつての私なんだということをより皆さんにも知つていただきたいです。今回平成最後の新年号ということでも縁起も良いです。良い機会かなとも思つています」

新しい年の幕開けにびつたりな抱負をお話された志岐さん。そんな志岐さんの夢はなんでしょうかと尋ねると「夢ということとは未来のことですよ」と。

「明日や未来のことは誰にもわからない。だからその時起きたことをひとつずつ感謝して、裏切らないで、感動に残るものを作りたいですね。嘘偽りなく、選んでもらえたことに感謝しながら仕事をしたいです。ケイジやなくて、それを見た方が触れた方が感動してくださつたら最高ですね。そんな嬉しい感情はもちろんだけど、失敗したものも自分のものにして、次になにかの役に立てたいですね。そして今回の日商の件でもですが、できる?と打診してもらつたことが嬉しくて、やろう!と思ひました。できるできないだけの計算じゃないです。させよう、やる!そうやってひとつひとつクリアしていくことが私の夢ですね」